

門脈圧亢進症に伴う重篤な合併症としての食道静脈瘤破裂に対する非観血的止血法として、内視鏡的硬化療法は近年急速な発達を遂げ、臨床的に不可欠な治療手技として定着しつつある。しかし、その方法としては、血管内注入と血管外注入、両者併用法があり、硬化剤としても、それぞれ種々の薬剤が利用されており、更に注入量その他の細かい手技も諸家により微妙に異なっている。このような各種の治療手技の長所・短所の比較を含め、本法の長期遠隔成績、その有用性と共に、限界と副作用などを明らかにするため、本特集号が企画されたが、先年不幸にも逝去された杏林大学外科故相馬智教授が中心となられて編集企画委員会が持たれたことを報告し、故教授の御冥福を心からお祈りする次第である。

出月氏は最近の硬化療法発達に至る食道静脈瘤の外科的手術法発達の歴史を明らかにすると共に、食道静脈瘤直達手術と内視鏡的硬化療法のそれぞれの適応と位置づけの必要性を示唆している。内視鏡的硬化療法自身については、本邦における先覚者である高瀬氏、血管周囲硬化と共に血管内注入併用法を導入した鈴木氏、更に、硬化剤の種類や注入法を改良した幕内氏の論文は、この分野における現在の代表的な論者の臨床成績を示し、本法の有用性を物語って余りある。しかし、剖検例の検索成績（荒川氏〈座談会〉、熊田氏）も照らし合わせると、本法施行後の再発を少なくするためには、更に工夫が必要であること、また、原疾患が肝硬変のみの場合と、肝癌合併例で門脈浸潤を認める場合、PBCなどの差により、あるいは食道静脈瘤の重症度の差により、治療成績はかなり異なり、その病態に応じた異なった対応が必要かもしれない。各種の手技を代表する専門家による座談会は、互いに自分の手技に拘泥せず、微妙な手技の差や問題点を明らかにしており、更に副作用についても忌憚のない意見が述べられ、実地に本法を利用する医師には教訓に満ちた充実した内容と言える。本法の一層の改良と発達を望む次第である。

<福地創太郎>

<編集> 早期胃癌研究会

胃と腸

発売予定 6月3日
定 価 1,700円

6月号(第20巻・第6号)予告

主題／慢性胃炎をどう考えるか

主 題	胃底腺領域における慢性胃炎の診断と評価……………	虎の門病院・消	山田 直行・他
	幽門洞胃炎を中心にした慢性胃炎の診断と評価……………	大阪府立成人病センター	竜田 正晴・他
	慢性胃炎の病態生理と内視鏡所見……………	山口大学・1内	岡崎 幸紀・他
	病理形態学の立場からみた慢性胃炎—胃体部腺の変化を 中心に……………	都立駒込病院・病理	滝澤登一郎・他
	ガストリン分泌能・ガストリン細胞分布よりみた慢性胃炎と 腺境界……………	九州大学・2内	南部 匠・他
	慢性胃炎における内分泌細胞異常……………	新潟大学・第1病理	伊津野 稔・他
座談会	慢性胃炎をどう考えるか……………	山口大学・1内	竹本 忠良・他
今月の症例	……………	都がん検診センター	細 井 董 三

(担当) 窪田・尾島・長谷川・大竹